

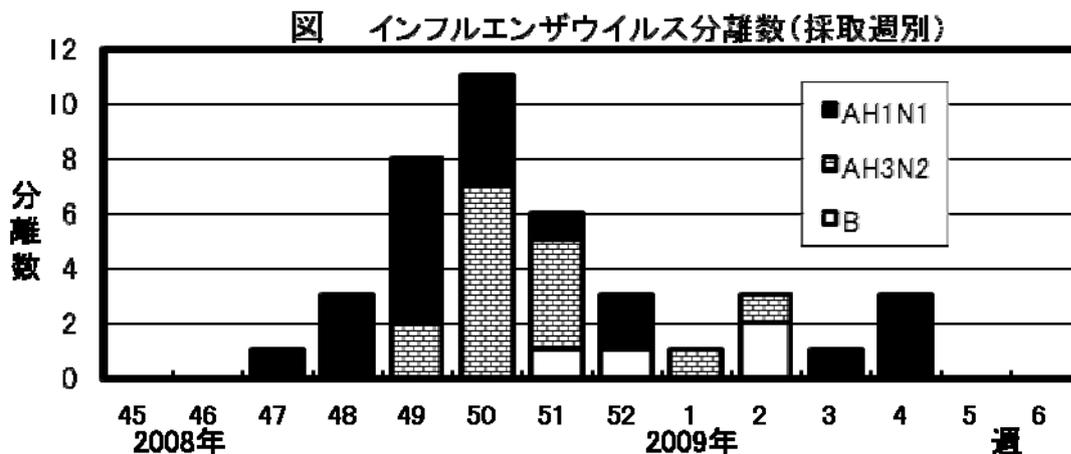
インフルエンザ - 今冬の流行 -

(1) 報告患者数の増加

今冬のインフルエンザ流行は昨冬よりやや遅く始まり、定点あたり患者報告数が10.00を超えたのは、2009年第2週(13.39)です(昨冬は2007年51週で12.08)。しかし第3週には23.89となり、すでに昨冬のピーク(2008年第5週の15.66)を大きく超えており、規模の大きな流行となることが懸念されます。

(2) ウイルス分離状況

2009年第4週(1月25日)までに、埼玉県衛生研究所およびさいたま市健康科学研究センターで分離されたウイルスは、A/ソ連(H1N1)型21株、A香港(H3N2)型15株、B型4株です(下図)。このことから、3種類のウイルスによる流行であることがうかがえます。



(3) オセルタミビル耐性マーカー変異 A ソ連型ウイルスの出現

今冬に全国で分離、解析された A ソ連型ウイルスの殆どに、オセルタミビル(タミフル)耐性マーカー変異(H275Y)が見いだされています(<http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/pr3483.html>)。埼玉県衛生研究所において、今冬初め(2008年11月下旬~12月上旬)に県内で分離された A ソ連型ウイルス8株を調べたところ、8株全てにオセルタミビル耐性を示唆する変異を認めました。今後、新たに分離されたウイルス株についても調査を継続する予定です。

*「オセルタミビル耐性マーカー変異」:インフルエンザウイルスの持つノイラミニダーゼ蛋白の275番目のアミノ酸が、オセルタミビル耐性の A ソ連型ウイルスではヒスチジン(H)からチロシン(Y)に変化しているので、分離されたウイルスの遺伝子を解析してこの変異の有無を調べているものです。

病原体定点の先生方には、引き続き検体採取の御協力をお願いいたします。

インフルエンザに関する最新の全国情報は、国立感染症研究所感染症情報センターのホームページ(<http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/index-kv.html>)でご覧になれます。